

I君のコミュニケーション・ツールについて

いとう まもる Mamoru.itou@nifty.com

I君とのかかわりは・・・

2013年4月、私は肢体不自由児対象の特別支援学校に非常勤教員として赴任しました。主な職務は、ICT機器活用のサポート。I君は、その時は中学部一年生。自立活動担当の先生から、「緊張が強く、日常的に慣れ親しんだ人でないとなかなかその発語の内容が聞き取れない。表現方法をなんとかしたいのだけれど・・・」という相談を受けました。ただ、私のその年の所属は小学部だったということもあり、このケースについては、具体的な対応は出来なかったのですが、翌年中学部に所属替えになってI君の理科の授業の担当、かつ、給食の時間を一緒に過ごすことが出来るになりました。

でも、理科の授業は複数の生徒を対象とする授業なので、なかなかコミュニケーションに関する個別指導の時間はとれませんでした。そこで、「マンツーマン対応ができる特設の自立活動の時間帯に、まず体の緊張を和らげる取り組みを行っていただき、体の緊張が緩んだ段階で、私も参加させて頂き一緒にコミュニケーション指導について試行していこう」という事になりました。

(以下、その時の初日の記録の一部を書き写しておきます)

第一回目として、5月2日、ご本人にその趣旨説明を・・・
目標は、「高等部卒業までにはタブレットを自分自身で書けるようにすること。お母さんとかヘルパーさんに聞き書きをしてもらうのはなんとも・・・だもんねえ・・・」との説明に、本人もニヤリ。(^.^)

課題はたくさんありますが・・・(@_@) 小学部1年の時から、外部専門家（肢体不自由児対象の特別支援学校には、何年か前から学校外の専門機関から専門家の方がサポートに入るようになりました）の方も、「どのようなAACを使用すればよいか。使用できるか」、「発声促進器を入力スイッチとして使えないか」など、色々試行されてきたようです。その記録も参考にしながら…

（注：AAC = AAC (Augmentative and Alternative Communication ; 拡大代替コミュニケーション) とは、話すこと・聞くこと・読むこと・書くことなどのコミュニケーションに障害のある人が、残存能力（言語・非言語問わず）とテクノロジーの活用によって、自分の意思を相手に伝える技法のことです。AACの技法の種類には、大きく分けて**ノンテク**、**ローテク**、**ハイテク**の3つがあります。

STナビ <http://stnavi.info/app/aac/> より)

どんなツールを使うか： パソコンを使うか、専用ツールを使うか

パソコン（iPadも含む）の方が汎用性もあり、その年から高等部の生徒には就学奨励費の対象（1年度追加5万円まで）となったので、将来的にはパソコンの活用を考えた方がいいのかも知れませんが、今回は初回ということなので、まずはどんな事を行うのか本人が簡単にイメージできるようにセッティングが簡単な「[レッツチャット](#)」を使いました。

<http://panasonic.co.jp/ism/fukushikiki/letschat/index.html>



どんな姿勢で、どのような入力方法を使うか

「[レッツチャット](#)」の場合、スイッチを二つまで接続できます。2スイッチ方式の方が文字入力の効率はいいのですが、逆に二つのスイッチに対応する分、本人の負担も大きくなります。また、本人の姿勢だけでなく、機器とスイッチの固定方法も問題になります。また、どんなスイッチを使うのかも問題になります。

まあ、課題はたくさんありますが、本人の体にあまり負担にならないように、少しずつチャレンジしていければと思っています。なるべくこまめに経過報告をしていくようにしますので、お気づきの点等あれば連絡いただければ幸いです。

(2014年5月2日)

その後、1年をかけて、視線入力を含む各種入力スイッチ・ハード・ソフトなどなどの検討をへて、「現状では、Windows上で動く、[ハーティラダー](#) + 握りスイッチがいいだろう」という結論に達しました。

(注：ハーティラダー 手などが不自由なため、キーボードやマウスでの入力が出来ない方のために開発された文章入力用のソフトウェア。このソフトの開発者ご自身が、重度肢体不自由という障害をお持ちで、それ故、パソコン黎明期ごく初期のころから、レッツチャットなどでは不可能な、障害者向けのきめ細やかなソフトを開発し続けておられ、最近では、視線入力モードにも対応したバージョンも開発されました)

<http://takaki.la.coocan.jp/hearty/>

I君のハーティラダーの場合、画面に表示された50音表上にカーソルを自動的に移動させ、スイッチの入力によって文字を決定する「オートスキャンモード」を利用。さらに、キーボードの無効時間・有効時間・キーボードとカーソル移動のオートリピート開始時間・間隔設定など、非常に細かい設定がなされています。また、一般的な文字入力モードに加えて、当方からの要望に応じて、試験問題解答用の別メニューも用意して下さいました。ただ・・・この「非常に細かい設定が可能」と

いう部分が、「卒業後もこのようなデリケートな環境を維持出来るのか」という別の問題を残すこととなります。

これで I 君の表出手段もひと段落したのですが、私自身は持病の腰痛の悪化のため、盲学校へ異動しなければならなくなっていました。そこで、自立活動担当の先生とは、日常的には、メールで情報交換し、時々、盲学校の勤務に影響の出ない範囲で訪問させて頂くことにしました。そして、自立活動担当の先生の指導の結果、一年間で、簡単な単語入力が可能な段階にまで到達することが出来ました。

そして、さらにその翌年、I 君の通学している学校の S 先生が、「支援機器の活用」をテーマに、東京都の研修センターに向向することになりました。S 先生は、その問題意識「学校卒業後の機器の扱いやすさ等も考慮する必要がある」から、iPad 等を活用したカリキュラム開発研究をまとめられました。（私は、非常勤教員としての勤務（退職後 5 年間の勤務が可能）が終了したので、純粋なボランティアではなく、東京都の退職ボランティアという制度にのっかる形で、その研究を側面援助させて頂きました）

そして今年度。4 月から S 先生は、現場に復職され、I 君の担任になり、I 君と一緒に楽しく学校生活を始められています。私もまた、今年度も退職ボランティアとして、時々訪問させて頂いています。

肢体不自由児対象の特別支援学校・・・日常的にはなかなか厳しいことも多いですが、少しずつ支援の輪も広がっているように思います。私も可能な範囲で、その楽しさの輪の一つであり続けられればと思っています。

2017 年 8 月